



# 人文研アカデミーの10年

京都大学人文科学研究所



# 10周年に寄せて

大浦康介 (人文研教授)

人文研アカデミーは、正式発足したのが2006年4月なので、今年で10周年を迎える。早いような遅いような、印象はさまざまだろうが、ひとつの節目であるにはちがいない。ここで少し過去を振り返ってみてもいいかもしれない。

「正式発足」とことさら言うのは、レクチャー・コンサートなどのイベント開催や全学共通科目への授業提供はその2年前から行っていたからである。今回、過去の資料を漁ってみたら、すでに2003年7月の「中期計画・参考資料」に言及があった。そこには「『人文研アカデミー』（仮称）を開設する」とあって、「本研究所は、研究成果の公開、社会還元の要請に応える活動の一環として、『人文研アカデミー』を開設し、一般市民、大学院生などを対象に、最新の研究成果を盛り込んだ質の高い講義、セミナーを提供する」と書かれている。注意すべきはそこに「春季および秋季、それぞれ10回程度の連続講義を行う」とあることで、当時はどうもこうした活動を目玉と考えていたようである（この「資料」を書いたのはたしか私なので、こんな他人行儀な言い方をするのはおかしいが）。これは現在も共同研究班の成果発表の場である春秋の「連続セミナー」に引き継がれているが、当時はむしろ個人の連続講義を考えていた。私の念頭にあったのは（大変おこがましいが）コレージュ・ド・フランスの講義である。

じつは、所報『人文』の「創立70周年記念」と銘打った第46号（1999）に「人文回顧Ⅱ—21世紀を展望して」という座談会が載っていて、以前所長だった吉川忠夫さんや阪上孝さんをはじめ、小山哲さん、金さん、富谷さん、武田さん、私などが参加しているのだが、私はすでにそこで「コレージュ・ド・フランス方式というのを提唱したい。年10回程度、一般向けに授業をします。誰が聴きに来てもいいかわりに、単位などは出さない。共同研究をやるか、これをやるか、それを所員の最低のノルマとしたらどうでしょう。もちろん両方やる人がいてもいい」などと放言している。所員のノルマ云々は当然ながら完全にスルーされてしまったが、私は、当時コレージュに勤めていた友人から情報収集するなどして、案外大まじめにこの構想を考え、周囲に吹聴してもいた（誰が言い出したか、「コレージュ・ド・人文」などという、いま考えても恥ずかしくなるようなネーミングまで出ていたように記憶する）。手前勝手な言い方を許してもらえば、人文研アカデミーの発想の「ルーツ」はこのへんにあると言えるかもしれない。もう20年近くも前のことだ。

私の「妄想」はさておき、こうした議論が出てきた背景には、人文研の「教育的貢献」が焦眉の課題となりつつあったという時代状況がある。当時の所員の多くは、文学研究科への踏み込んだ協力にもまだまだ消極的だった。先の座談会で吉川さんは「（研究所の存続）と引き換えに、大学院を持って、教育にも乗り出さないといけない、というすり替えが起こっても問題です」と言っておられるが、この「すり替え」は、当時の所員の偽らざる気持を代弁する言葉だったろう。ただその一方で、独立研究科の設立を求める声があったことも事実である。研究所の本分はあくまで研究であるという思いと、研究だけをしていればよいというのはもはや通用しないという認識のあいだで揺れていたというのが現実ではなかっただろうか（この「迷い」はいまや完全に過去のものとなったように思われる）。そんななか、研究所独自の教育のあり方とは何か、従来からあ

る定期講演会（夏期講座、開所記念講演会）とは一味ちがう新たな社会貢献のあり方とはどのようなものかなどと自問自答していたのである。先述した2004年度からの全学共通科目への授業提供は共同研究班を母体とするリレー講義だったが、これなどもこうした気運を受けてのことだった（一時期は人文部が提供するポケットゼミにも「人文研アカデミー」の名称を冠していたと記憶している）。もちろん所の「お墨つき」が得られる前の話である。

人文研アカデミーの事業内容や研究所での位置づけが「公に」議論されるようになったのは「人文研アカデミー設置ワーキング・グループ＝WG5」（2003～2005）においてである（森さんが所長だったときで、当時は沢山のワーキング・グループが作られた）。行きがかり上、私が代表をつとめたが、WG5が2005年11月にまとめた「人文研アカデミー素案」では、「複数講師によるリレー講義」を、「原則として最終年度に入った研究班が担当するもの」として、「人文研アカデミーの中核事業と位置づける」と明記されている。人文研のアイデンティティーともいべき共同研究の社会還元（印刷物とはまた別の形で）の場として位置づけるということだ。この原則はいまでも活きている。ただその一方で、単独講師（所員、ゲスト、名誉所員など）による連続講義、各種シンポジウム、全学共通教育との連携、青少年を対象とするジュニア・アカデミー、読書会など、提案されている事業はきわめて多様である。

かくして2006年4月、人文研アカデミーは正式に発足し、人文研の社会貢献窓口として活動を開始した。当初は京大記者クラブでプレス発表も行ったが、なんといっても大きかったのは、毎年3～4月に年間プログラムを印刷・公表するようになったことだろう。そこから逆算して年度ごとの準備作業日程を定め、新たに設けられた人文研アカデミー委員会（現講演委員会）がこの作業に当たった。これ以降のことは周知のところなので、多言は不要だろう。それにこの冊子に収められているポスターやチラシを見れば活動の軌跡はつぶさに分かるはずである。ヨガ教室や公開句会などといったユニークなイベントも催したし、京都アスニー、NHK文化センター、朝日カルチャーセンター、アンスティテュ・フランセ、京大博物館といった他機関との連携も活発に行った。年間10前後のイベントを催し、少ないときでも40～50人、多いときには300人を超える聴衆を集め、それを10年近くやって来たのだから、延べ動員数は推して知るべしである。いちいちお名前は挙げないが、イベントの主役をつとめていただいた方々はもちろん、アカデミー委員やオフィス・アシスタント、そして事務の方々のサポートのおかげである。

人文研アカデミーの活動は、学内や学外での認知度の高まりとともに、所内でも認知される場所となった（少々皮肉な言い方だが、この順番は逆ではない）。いまや所の「実績報告」には欠かせない要素である。しかしアカデミーだけはルーチン化・硬直化してほしくないと思う。もともと自由な発想で、いわば「ゲリラ的」に、複数の方向性をもって始まった活動である。共同研究班による「連続セミナー」をいちおう別にすれば、何をどのようにやってもいいのである。面白ければいいのだ。10周年を機にこの「原点」を見つめなおすのも悪くないと思うのだが、どうだろうか。



人文研アカデミー ポスターギャラリー

▶▶ 2005

**第2回 人文研アカデミー レクチャー・コンサート**  
 講演・演奏のフュージョンコンサート「ハルシム」  
 講師・演奏・解説 Improviser, Jaker, Interpreter  
 日時：6月15日(木) 19:00  
 会場：関西日仏学館内 稲畑ホール  
 主催：フュージョン・ワークショップ  
 協賛：NHKラジオ第1放送

▶▶ 2006

**人文研アカデミー**  
 レクチャー・コンサート  
 「フランク・リストと超絶技巧の美学」  
 日時：6月15日(木) 19:00  
 会場：関西日仏学館内 稲畑ホール  
 主催：フュージョン・ワークショップ  
 協賛：NHKラジオ第1放送

**人文研アカデミー**  
 共同研究セミナー  
 日仏交感の近代  
 ～文学・美術・音楽～  
 日時：2006年11月27日(日) 18:30～  
 会場：京都府立総合資料館 大ホール  
 主催：京都府立総合資料館、京都府立総合資料館学芸部、京都府立総合資料館学芸部

**1912/1939年**  
 2つの世界大戦前後 / 2つのロシア革命  
 2006年11月27日(日) 18:30～  
 会場：京都府立総合資料館 大ホール  
 主催：京都府立総合資料館、京都府立総合資料館学芸部、京都府立総合資料館学芸部

**京大人文研アカデミー**  
 アントニオ・ネグリの講演  
 「知識労働とプレカリアート」  
 日時：2008年3月25日(火)  
 会場：京都府立総合資料館 大ホール  
 主催：京大人文研アカデミー

▶▶ 2008

**人文研アカデミー**  
 2008年7月5日(日) 13:00～17:00  
 会場：京都府立総合資料館 大ホール  
 主催：京大人文研アカデミー

**人文研アカデミー**  
 古典再読  
 いま読んだらこんなに面白い(3)  
 2008年7月5日(日) 13:00～17:00  
 会場：京都府立総合資料館 大ホール  
 主催：京大人文研アカデミー

**夏期公開講座**  
 名作再読  
 日時：7月26日(土) 10:00～12:00  
 会場：京都府立総合資料館 大ホール  
 主催：京大人文研アカデミー

**人文研アカデミー**  
 いま、なぜ、ナチスを問うのか  
 帝国日本を生きたナチズム  
 ～衝撃と反響の両面性～  
 日時：2008年7月26日(土) 10:00～12:00  
 会場：京都府立総合資料館 大ホール  
 主催：京大人文研アカデミー

**人文研アカデミー**  
 生命のランドスケープ  
 日時：2008年7月26日(土) 10:00～12:00  
 会場：京都府立総合資料館 大ホール  
 主催：京大人文研アカデミー

**人文研アカデミー**  
 いま「著作権・知的財産権」問題が問われるもの  
 M.クシファラス、東浩紀、g新部 裕  
 日時：2008年7月26日(土) 10:00～12:00  
 会場：京都府立総合資料館 大ホール  
 主催：京大人文研アカデミー

**人文研アカデミー**  
 高校生のための  
 人文研・ジュニアアカデミー no.2  
 イメージを読む作法  
 日時：2008年7月26日(土) 13:00～17:00  
 会場：京都府立総合資料館 大ホール  
 主催：京大人文研アカデミー

**人文研アカデミー**  
 アジアの仏教遺跡を掘る  
 日時：2008年7月26日(土) 10:00～12:00  
 会場：京都府立総合資料館 大ホール  
 主催：京大人文研アカデミー

**人文研アカデミー 2009**  
 知のランドスケープ  
 日時：2009年7月26日(土) 10:00～12:00  
 会場：京都府立総合資料館 大ホール  
 主催：京大人文研アカデミー

▶▶ 2007

**人文研アカデミー**  
 2007  
 日時：2007年7月26日(土) 10:00～12:00  
 会場：京都府立総合資料館 大ホール  
 主催：京大人文研アカデミー

**人文研アカデミー**  
 第一次世界大戦と芸術  
 日時：2007年7月26日(土) 10:00～12:00  
 会場：京都府立総合資料館 大ホール  
 主催：京大人文研アカデミー

**人文研アカデミー**  
 伝統中国の庭園と生活空間  
 日時：2007年7月26日(土) 10:00～12:00  
 会場：京都府立総合資料館 大ホール  
 主催：京大人文研アカデミー

**Didier Galas**  
 日時：2007年7月26日(土) 10:00～12:00  
 会場：京都府立総合資料館 大ホール  
 主催：京大人文研アカデミー

**人文研アカデミー**  
 名作再読  
 都市  
 日時：2007年7月26日(土) 10:00～12:00  
 会場：京都府立総合資料館 大ホール  
 主催：京大人文研アカデミー

**人文研アカデミー**  
 共同研究の可能性  
 人文研80年の回顧と展望  
 日時：2009年11月5日(土) 13:30～16:00  
 会場：京都府立総合資料館 大ホール  
 主催：京大人文研アカデミー

**人文研アカデミー**  
 読むカンをも  
 立木康介を  
 日時：2009年11月12, 19, 26日(土) 13:30～16:00  
 会場：京都府立総合資料館 大ホール  
 主催：京大人文研アカデミー

**人文研アカデミー**  
 東西文化交流の主役  
 ソグド人の美術と言語  
 日時：2007年11月18日(日) 1:00～6:00 pm  
 会場：京大人文研アカデミー  
 主催：京大人文研アカデミー

**京大人文研アカデミー**  
 「教科書では学べない京都」  
 日時：2007年11月18日(日) 1:00～6:00 pm  
 会場：京大人文研アカデミー  
 主催：京大人文研アカデミー

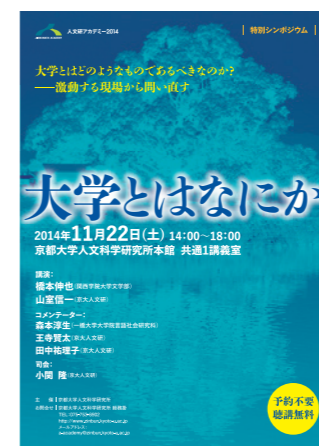
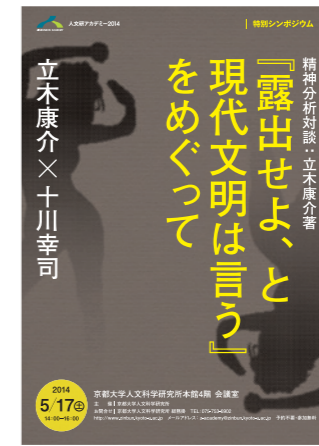
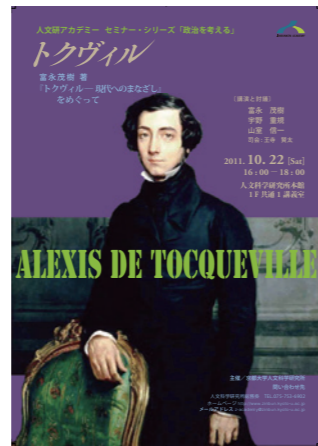
**人文研アカデミー**  
 西洋のフィクション  
 東洋のフィクション  
 日時：2007年11月18日(日) 1:00～6:00 pm  
 会場：京大人文研アカデミー  
 主催：京大人文研アカデミー

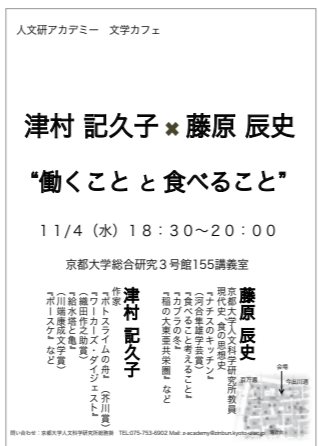
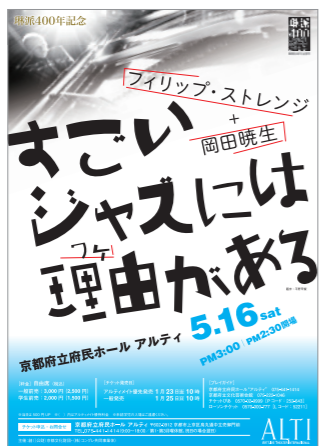
**人文研アカデミー**  
 2010  
 日時：2010年7月26日(土) 10:00～12:00  
 会場：京都府立総合資料館 大ホール  
 主催：京大人文研アカデミー

**人文研アカデミー**  
 人類学の誘惑  
 日時：2010年4月17日(日) 10:00～12:00  
 会場：京都府立総合資料館 大ホール  
 主催：京大人文研アカデミー

**人文研アカデミー**  
 小説新報 第7期  
 中国近代の通俗小説を読む  
 日時：2010年7月26日(土) 10:00～12:00  
 会場：京都府立総合資料館 大ホール  
 主催：京大人文研アカデミー

**人文研アカデミー**  
 名作再読  
 いま読んだらこんなに面白い(3)  
 日時：2010年7月26日(土) 10:00～12:00  
 会場：京都府立総合資料館 大ホール  
 主催：京大人文研アカデミー





co-design: ito, sasaya, maeda, tani, 他

長い付き合い

小関：よろしくお願いします。人文研アカデミーが今年で11年目に突入しました。この種の企画としてはかなり成功したといってよいと思うんですが、そこで、いわば最大の功労者であるアクティブKEIの伊藤さんから話を伺う、そういう趣旨でお越しいただきました。

伊藤：こんにちは、それ持ち上げすぎです。

小関：思えば長い付き合いになりますね、ずっとチラシやポスターを引き受けてもらって。

伊藤：そうです、本当に楽しい仕事で。

小関：でも、考えてみると僕はアクティブKEIという会社のことは何も知らないんです。何をやっていらっしゃる会社ですか、というところから伺おうかな。

伊藤：アクティブKEIはいわゆるイヴェンターでして、コンサートやシンポジウムを総合企画制作したり運営したりする会社です。

小関：いつ頃からやっているんですか。

伊藤：実はもう30年ぐらい、加藤登紀子ほろ酔いコンサートとか円山野音とか、今は伝統芸能も、なんでも屋です(笑)。

小関：でも、30年も続いているというのはなかなか。

伊藤：しぶといです(笑)。

小関：しぶといし、やはり信頼を得ているということでしょう。

伊藤：いや、表に出ない黒衣仕事なので隅っこでやっています(笑)。

小関：いろいろなイヴェントを手がけてきた中で、人文研とか、大学の企画をやる場合には、他とは違う特別な力点みたいなのがありますか。

伊藤：本来は大学の印刷物は端正なものが多いのですが。

小関：大学がやるのは通常そうですね。

伊藤：大学はすました権威ではなく、学問は楽しいんだよとか、ハテナ？があるんだよ、というのを込めたいなとずっと思っていました。歌舞伎の衣裳のようなダイナミックな色合わせとか、大胆なデザインで生き生きした大学を見せたいと。

小関：たしかに人文研アカデミーの場合、伊藤さんが最初に敷いた路線に、こちらがまんまと乗せられているところがあるかもしれないです。

伊藤：いいえ、とんでもないです。

チラシあれこれ

小関：作っていただいたチラシを見ていきたいと思います。やっぱり懐かしいのはこれですね。①

伊藤：そうです、一番最初の「年間プログラム」です。

小関：もともと3種類ぐらいアイデアがあって、他のは比較的普通でしたよね。どれがいいか、僕らの間でもあまり意見が一致なくて、そんな時に、これは



インタビュー  
人文研アカデミーの10年を振り返る  
語り手 伊藤めぐみ(アクティブKEI取締役)  
聞き手 小関隆(人文研教授)



▶ 2005



▶ 2008 ②



▶ 2009 ③



▶ 2010 ④



▶ 2007 ⑤

かなり鮮明に記憶があるんだけど、当時所長をやっていた金文京さんがふらっと現れて、「決まってるじゃん、断然これだよ」と指差したのがこれだったわけです。

伊藤：そうだったんですか。それは初めて伺いました。

小関：このデザインの場合、作り手の狙いはどの辺にあったんでしょうか。

伊藤：もともと丸のパターンをよく作るデザイナーだったんですが、「遊び」や「人と人のつながり」などをメインのイメージで。人がびっくりしているような、頭のような、いろいろな見方ができますね。

小関：このデザインが、初っ端のところアカデミーの方向性みたいなものを決めた感が強いな。

伊藤：そうですね。

小関：あと、年間プログラムに限らず、これは自信作だというのがあれば。

伊藤：自信作というより、苦勞したものはやっぱり懐かしいなと思います。入稿時にとんでん返しがあったり。

小関：これは僕も挙げようと思っていたんですよ、「身体＝フェティッシュをめぐる技術」②この気持ち悪さはちょっと忘れ難いものがあります。

伊藤：そう、妙木忍さんがご講演の中で「チラシが内容にぴったりですね」と言ってくださったんで、もうめっちゃ甲斐があったーって。

小関：このおどろおどろしさはすごい。

伊藤：ありがとうございます。

小関：あ、これもなかなか怖いな、「21世紀の音楽批評」③

伊藤：怖いですか？(笑)、結構好きですけど。

小関：この時はすごく人が集まったんですね。

伊藤：あと、「フィクション論の諸相」って黒いチラシが好きでした、大浦先生ご担当の④子どもの人形があって。

小関：あれもちょっと気味の悪いやつでしたよ。

伊藤：不気味なものに人は惹かれるのかも。

小関：あと、僕は毎回「名作再読」が好きなんです。

伊藤：そうですね。

小関：他と違って、お上品系で楚々とした感じがします。これが多分最初のものなんですけれども⑤ちょっと似たような系統のものに「東アジアにおける健康思想の系譜」があって、これも好きですね⑥

伊藤：ありがとうございます。これはデザイナーがこの講演のために絵を描いて……懐かしい。ちなみに「名作再読」のイラストのものは、下鴨古本市のチラシを描いているイラストレーターに依頼して名作＝古本という隠し遊びをしています。

小関：僕個人は司会者をやることが多くて、やっぱりお客さんが入るとうれいじゃないですか。そういう意味でいうと、やっぱり圧倒的に動員力があるのはレクチャー・コンサート。

伊藤：ですね。

小関：ですね。その中でもこれは完成度が高いなと思うのが、「狂乱の

1920年代」⑦

伊藤：ロシア・アヴァンギャルド風というか、アメリカのリキテンスタインぽさもちょっと入って。

小関：演奏される曲とのマッチングも非常に良かった記憶があります。

伊藤：うれしいです。

小関：レクチャー・コンサートはこのところすっかりジャズに向かっているんですが、ジャズものでインパクトあったのはこれです。「ジャズ・ヴォーカルを伴奏する」⑧

伊藤：この指とキャッチャー・マスクみたいなマイク。

小関：やっぱりこのマイクが。

伊藤：そうですね、1950年頃のマイク。

小関：ジャズが良かった時代を端的に見せてくれますね。じゃあ、これはしんどかったなとか、苦勞したな、というのはどうでしょう。

伊藤：字がなくて苦勞したというのはありません。

小関：「異体字の眩暈」⑨ですね。これはたしかに大変だ。

## オーディエンス

小関：ちょっとチラシから離れて、オーディエンスとして参加して面白かった企画はありますか。

伊藤：行ったのは全部面白かったです。行けなくて残念というのはいっぱいありました。

小関：せっかくだから、具体的に幾つか出してもらえますか。

伊藤：さっきおっしゃった武田先生の養生学[「東アジアにおける健康思想の系譜」]は、長い鍼の実物など見せてもらってびっくりしました。武田先生はお気難しそうな方で、普通だったらようしゃべらへんのですけれども、チラシ打合せの時も、ご研究の話が面白くて面白くて。

小関：講演での武田さん、文字通りしゃべりまくってましたよね、よく覚えてます。えらくウケもよくて。ところで、最近アカデミーの動員力が上がっているんですよ。

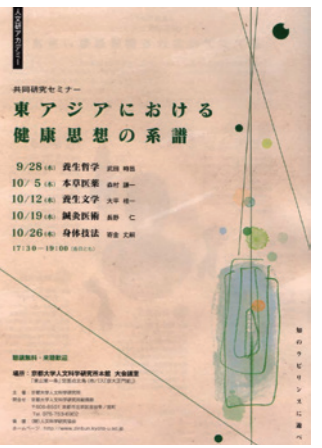
伊藤：良かったですね、素晴らしいです。

小関：もちろん角田光代さんとか、著名人が来ればお客さんがいっぱいになるというのは分かるんだけど、例えば今年、「2016年の論点」というものすごく堅いのをやったじゃないですか⑩

伊藤：はい。残念ながら行けていないんですけど、いっぱいだったんですか。

小関：けだし真面目な企画だったんですが、立ち見が出て入れない人もいました。この動員力、いったい何でだろうというのをちょっと考えているところでした。

伊藤：大学は最後の良識の府という期待が普通の人にはあって、そこに行って自分の考えの根拠をはっきりさせる、そんな欲求はあるんじゃないかなと思うんです。



▶ 2006 ⑥



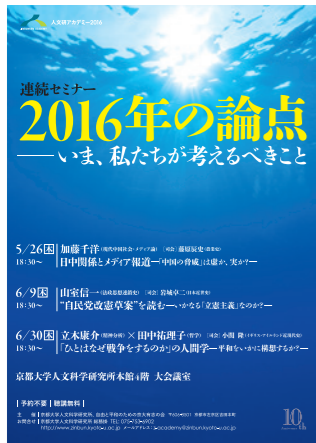
▶ 2008 ⑦



▶ 2014 ⑧



▶ 2011 ⑨



▶ 2016 10



▶ 2014 11

小関：京都の特性もありますかね。

伊藤：あるかもしれないです。

小関：何となく大学の敷居が低いんですよね。

伊藤：ですよね。となりに下宿してるボンが通ってるとことか。

小関：東京だと大学まで出かけていだけでも大変なんだけど、比較的ふらっと来られるというのは京都の強さのような気がしますね。

伊藤：かもしれないです。自転車の町です。

小関：人文研アカデミーに引きつけていうと、ちゃんとしたクオリティのものをやっていますよ、という信頼は勝ち得たんじゃありませんかね。

伊藤：そう思います。一昨年、第一次大戦の100周年で総括をされたじゃないですか [「第一次世界大戦再考」⑩]。今の世の中の方向と相まって、「戦争を総括しなきゃいけない」という意識があり、「あそこ(人文研)はこういう研究をきちっとやっていたらいいなって、それを発信している」という信頼があったかなと私は思います。

小関：そうおっしゃっていただけるとうれしいんですけど、たしかに第一次大戦のグループで出した本もなかなかよく売れたんですよ、あの種のものとしては。それは結構なことだけれども、何となく戦争というのがリアルに感じられる世の中が来ちゃっているのかな、などという懸念もなくはない。

伊藤：あるかもしれないです。でも、あれは「戦争」に向かい合って考えなきゃいけないという気にさせました。

## 変容する大学で

小関：話をもっと広げると、ご存じの通り、このところ大学は「改革」「改革」でどんどんしんどい場所になってきていて、にっちもさっちもいなくなっている感が強いわけです。役に立つ成果を出せ、効率を上げろ、ワールド・ランキング上位を目指せとか、そういう掛け声ばかりになって。で、そんな時に必ず出てくるのが「社会に開かれた大学」なんていうキャッチフレーズですよね。だから、公開講座の類がむやみに増える。人文研アカデミーにも、一面においては「ちゃんと社会に向けて発信してますよ」というアリバイ作りのような意味があるわけです。でも、それだけなのかというと必ずしもそうではなくて、人文研アカデミーで登壇している人たちを見てみると、結構にこにこしながら大喜びでやっている、やる気出してるってところもありますよね。人文研の教員たちは語りたくてしょうがないのかもしれない。

伊藤：こちらにも聞きたいところがあるんですけど。

小関：人文研の中でいつも似たような連中ばかり集まってやっているのはちょっと息苦しくもあって、外の人たちにも聞いてほしいなという思いを持っている人はかなりいる。だから、その意味でアカデミーがいいはけ口になっているともいえる。それと同時に、大学自体がぎすぎすしてきている時に、アカデミーのような企画というのははまだそこそ風通しよくやれるんですね。

伊藤：人文研には、やっぱり他の理学部とか文学部とかとは違う独立した

スタンスを感じます。創立80周年で[「人文研80年」⑫] 昔の人文研の熊倉功夫さんとかがお話しされた時に、人文研の成り立ちとか、色々なエピソードを伺いました。昔、梅棹忠夫さんが新しくできる国際的な機関に来ないかと打診された時に、それはまさに梅棹さんの夢の実現のような仕事で大喜びで引き受けたかったはずだが、人文研の会議で反対され、梅棹さんは合議制第一だからと、その仕事を断念した。しかし、会議で反対した人が数ヶ月後に海外から「やっぱり自分が反対したのは間違っていた」という手紙を送られたというエピソード。梅棹さんの「自分の気持ちより、人文研の一員として討議の結果を最優先する」精神、反対した人が海外にいても「自分の判断は間違っていなかったか」と考え続ける誠実さ、「話し合い」を最大限に尊重する。すごいなあと。そして、今でも人文研ではお互いに「先生」と呼び合わないで、「さん」づけで呼びはるのが好きです。ジャンルや年齢は関係なしに自由に尊敬しあってはる感じがします。

## 新しい方向性

伊藤：高校生とかが聴いても分かる内容の時もありますか。

小関：ジュニア・アカデミーというのを何回かやっていますよ。⑬

伊藤：あ、そうでしたね。

小関：高校生を相手に昔の文字を読んだりしたはずですよ。あと、最近だと藤原さんがキッチン・トークってのを。

伊藤：熊本でやっていたのでしたね。

小関：熊本まで行って、ナチスのレシピで向こうの高校生が料理をつくって、それを市民と一緒に食べがてら解説するというのをやっています。

伊藤：キッチンってどんなふうになっているんだろうと思ってたんです。

小関：非常に好評で、もう何度も彼は出かけていってるんですよ。

伊藤：京都でもやってほしいです。

小関：最後に、こんな企画はどうですかという提案があれば聞いておきたいです。

伊藤：思いつきですが……。お二人で対談される時に真剣に「けんか」をしていただくようなこととか。あるいは、専門外の雑学的なことも皆さんよくご存じなので、そんなのもしゃべってって話がどんどん転がっていくところを見るのも面白いだろうなと。話が盛り上がり、

小関：あらぬ方向に。

伊藤：横道に逸れ放題。

小関：それは面白いです。僕が司会でおろおろする状況が想像できますよ。

伊藤：全然終われなくなるとか。あと、音楽や映画もされていますが、他の表現と一緒に話を展開なさるとか。

小関：句会があったでしょう。

伊藤：あ、ありましたね。

小関：「京大マッハ」というのが。⑭



▶ 2009 12



▶ 2007 13



▶ 2012 14



▶ 2013 15



▶ 2014 16

伊藤：ですね。

小関：小説を書くっていうのもありましたよ[「文学カフェ いしいしんじ三本の時間」15]。

伊藤：いしいさんの「その場小説」、あれも行きました。

小関：そんなもんかな。

伊藤：かといって、あんまり聴講者にへつらわなくていいなとも思うんです。

小関：無理すると大体いいことないですからね。

伊藤：京大の話に戻るんですけども、修学旅行生の学内ガイドツアーがあるじゃないですか。学内施設を見たり、研究室にお邪魔するという。日が合えばアカデミーに参加してもらえばいいなと。

小関：学内ツアーではないんですけども、第一次大戦の公開合評会[「第一次世界大戦を考える」2nd series 16]の時に高校生の集団が来ました。どうもその高校の先生にちょっとつてがあたりしくて。

伊藤：じゃ、呼んだんじゃないけれども来られた。すごい、それはすごい。

小関：女子高の生徒たちが7~8人という規模でやって来て、著者たちに質問するんですよ。あれは面白かったです。

伊藤：そうですね。女子高生の方がはっきり言いそうな気がします。

小関：あれはなかなか新鮮な経験でしたね。僕らは日ごろから質問を受けることに慣れてるんですけど、あの時はみんな随分と緊張していました。

伊藤：そうですか。何を訊かれるんだろうと。

小関：修学旅行生でも何でも、夜になりがちだけれども来てもらえると面白いかもしれないです。

伊藤：関西教育考学でしたっけ、京大内ガイドツアーの会社があるんです。京大の院生が社長で。

小関：じゃ、タイアップして。

伊藤：そこにお知らせを送って、いらっしゃいと。iPSとか最先端のサイエンスばかりでなく、じっくり考える面白さや何を研究してもいいんだよというのを高校生に知ってほしい。

小関：それはお互いにとっていいことですね。参考にさせていただきます。こんなところですかね。

伊藤：ありがとうございました。

小関：これからもよろしくお願いします。

(2016年9月29日収録)



10周年おめでとうございます。これからも市民と大学を結ぶ架け橋としてのご活躍を心より期待しております。

「横断的研究」というのが大きく掲げられるようになって久しいですが、とはいえ京大の中でも、実際に分野横断型で“オープンな”研究会というのは少ないと思います。人文研アカデミーは、テーマの斬新さ、報告・司会の質の高さで、さらに“誰でも”行けば聞けるという点が、独特で、京大のオープンな研究会の中でも意義深いところだと思います。今後も永く続けられますことを願っています。

勤めている間は、何だかだと用事が入ってなかなか来られなかったが、退職してから、何とか連続して来れるようになった。むしろ、現役でいる時に来られていれば、もう少し仕事に活かせたのではないかと今、とても残念です。元高校教員  
(社会科、歴史担当)

初めて伺いました。自分が見ている、考えている世界とは違う世界で生きている方々のお話は、こんな視点もあるんだ、という気づきになり刺激的でした。たまにはこんなのもいな、と思えた時間でした。

初めて参加しましたがとても面白かったです。理系の人もこうした企画が好きな人は多いと思うので、そちらにもどんどん宣伝・告知を打っていただければと思います。

### 人文研アカデミーの10年

2017年3月15日発行  
非売品  
編集・発行 京都大学人文科学研究所  
606-8501 京都市左京区吉田本町 Phone. 075-753-6902  
デザイン・印刷 株式会社 アクティブKEI  
© 京都大学人文科学研究所 2017 \* 無断転載を禁じます



## 来場者の声

(2016年7~11月のアカデミー参加者から)



